

## 1. 高齢社会における健康問題、経済問題、生きがいに関する調査・研究【公益目的事業1】

### (1) 介護 QI(Quality Indicators)によるケアサービスの質の評価研究

H25-27 文科省科研費「ケア現場のエビデンス集積を促進する利用者データベースの構築」(代表者:石橋智昭)

H25-27 厚労省科研費「高齢者介護サービスの包括的評価に関する研究」(代表者:池上直己)

全国の14法人が参加する介護 QI 研究コンソーシアムの事業を通じて、約1千人の介護保険利用者のアセスメントデータからインターライ QI を国内で初めて算出し、認知障害の悪化や転倒の割合などの国際比較可能なアウトカム指標の算出が可能であることを明らかにしました。現在のデータベースの規模では、わが国のケア水準を明らかにするための事業種別(施設・居住系・居宅)の標準値を得るには至っておらず、今後、より大規模なデータベースを構築する必要がありますが、これまでの取り組みによってその基盤を確立することができました。

#### 学会発表

下線は当財団研究員(客員を含む)

- ◆ 日本ケアマネジメント学会第14回研究大会(平成27年6月)
  - ◇ 小野恵子・石橋智昭:在宅要介護者における訪問看護サービスのアウトカム評価研究
  - ◇ 阿部詠子・石橋智昭・池上直己:アセスメントを活用した介護老人保健施設入所者のケアマネジメント(1);アセスメントを利用したモニタリングの有用性
  - ◇ 阪村智美・阿部詠子・石橋智昭・池上直己:アセスメントを活用した介護老人保健施設入所者のケアマネジメント(2);事例A氏のケアプランとモニタリングにおける有用性の検討
- ◆ 第57回日本老年医学会学術集会(平成27年6月)
  - ◇ 池上直己・天野貴史・石橋智昭:居宅介護支援事業所とケアプランの質の評価

### (2) 介護予防事業のエビデンスを蓄積する自治体共同研究

松戸市、市川市と協力して自治体に蓄積されている既存データをICTの利活用により抽出し、効率よく事業を評価し、評価レポートを作成する手法の確立を目指しました。松戸市、市川市ともに計画通りのデータ供与を受け、事業評価報告書の作成と報告会を開催し、共同研究の意義に高い評価を受けることができ、平成28年度も研究を継続することを合意しました。

また市川市では、成果報告の一部を地域包括支援センター職員向け研修会で講演(鳥本)する機会を得るなど、当初計画以上の成果を得ることができました。

## 学会発表

下線は当財団研究員

- ◆ 第 74 回日本公衆衛生学会総会（平成 27 年 11 月）
  - ◇ 鳥本靖子・石橋智昭：地域支援事業への移行に向けた介護予防通所介護と通所リハビリテーションの効果検証
  - ◇ 石橋智昭・鳥本靖子：新規認定者における要介護度の改善
  - ◇ 牧野ひろこ・大森順方・石橋智昭・柴沼晃・神馬征峰：要介護高齢者とその家族介護者の心理的ウェルビーイングへの関連要因

## 寄稿

下線は当財団研究員

- ◆ 石橋智昭「研究テーマとしての『新しい介護予防・日常生活支援総合事業』」ダイヤニュース No.83

## (3) シルバー人材センターの社会的有用性に関する研究

H27 三菱財団社会福祉研究助成「高齢者が支え手側となる生きがい就業の有用性検証」（代表者：石橋智昭）

H26-H28 文科省科研費「高齢者就業の新たな調整型支援システムの構築に関する総合的研究」（代表者：藤原佳典）

参加センターが平成 26 年度と比較して倍増し、28 センターとなりました（平成 28 年 3 月）。2 年以上継続して調査に参加しているセンターのデータに基づく解析では、就業状況と健康維持（介護予防）の間に一定程度の相関があることが示唆されました。供与データに基づき各センター単位で作成した「分析結果報告書」は、介護予防効果のエビデンス資料として評価を受け、ほとんどのセンターが次年度も継続参加することが決まりました。

## 論文

下線は当財団研究員

- ◆ 石橋智昭：「生きがい就業を支えるシルバー人材センターのシステム」『老年社会科学』 2015. Vol.37-1:17-21
- ◆ 中村桃美・長田久雄・杉澤秀博「都市部シルバー人材センターにおける就業の高次生活機能の低下抑制への影響」『老年学雑誌』2015.春号第 6 号、15-24

## 学会発表

下線は当財団研究員（客員を含む）

- ◆ 第 57 回日本老年社会学会大会（平成 27 年 6 月）
  - ◇ 中村桃美・石橋智昭・長田久雄・岡真人：シルバー人材センター会員の地域活動への参加
  - ◇ 石橋智昭・中村桃美・塚本成美：シルバー人材センターのホワイトカラー出身会員の希望する仕事；全国から抽出した 36 センターの会員情報を用いて
- ◆ 第 74 回日本公衆衛生学会総会（平成 27 年 11 月）
  - ◇ 中村桃美・石橋智昭・長田久雄：シルバー人材センターの就業による介護予防効果；生活機能の改善に焦点をあてて

## 寄稿

下線は当財団研究員

- ◆ 中村桃美「シルバー人材センターの社会的有用性」ダイヤニュースNo82

## (4) うつ予防プログラムの効果検証及び定着普及に関する研究

平成 27 年度は、うつ予防プログラム（ハッピープログラム）を高齢者向け 4 教室（3 自治体）、勤労者向け 3 教室（1 企業、1 団体）実施し、多様な属性に対する効果の検証を行いました。その結果、教室前後における短期効果は、高齢者だけでなく現役の勤労世代に対しても効果があること、また、ポピュレーションアプローチだけでなくハイリスクアプローチにおいても効果があることが確認できました。さらに、過去に教室を受講した高齢者についてフォロー調査を行い、効果の持続性を検証しました。

また、プログラム実施自治体へ財団からファシリテーターを派遣するとともに、プログラムの定着及び運営自立化のために、自治体のファシリテーターのスキルアップ研修、運営体制整備のサポート等を行った結果、新潟県で行っている教室に関しては、ほぼ自立運営に移行することができました。

注. ハイリスクアプローチ：病気等になる可能性の高い人やグループに対して個別に働きかけるもの。

ポピュレーションアプローチ：集団全体に対する働きかけを行い、集団全体の健康状態を向上させるもの。

## 学会発表

下線は当財団研究員

- ◆ 日本健康心理学会第 28 回大会（平成 27 年 9 月）
  - ◇ 愈今：高齢者のうつ状態に対するうつ予防プログラムの介入効果

## 講演

- ◆ うつ予防、幸せ発見関連講演会（7 回開催）

## 寄稿

下線は当財団研究員

- ◆ 黒澤侑子、安順姫「ハッピー自主グループ活動の推進 ～ハッピープログラム修了者の自主グループ活動に対する支援事例～」ダイヤニュース No.82
- ◆ 愈今「ハッピープログラムの介入は労働者のメンタルヘルスの維持増進に有効」ダイヤニュース No.84

## 刊行物等

- ◆ 『幸せアップ実践ワークブック ーより幸せな日々を過ごすためにー』（平成 28 年 2 月）
- ◆ DVD『心も体も健やかにしてくれる Y式五感健康法』（平成 28 年 3 月）

## (5) 地域高齢者の精神的健康度の予後に関する縦断的研究

H27-29 文科省科研費「地域在住高齢者の社会的孤立に対する支援構築に向けた実証研究」(代表者: 島田今日子)

平成 26 年末に終了した 5 年間の縦断調査のデータベースを構築し、高齢者の抑うつ症状発症に寄与する危険要因を解析しました。解析結果を対象フィールドの自治体へ報告するとともに、初年から 3 年間のデータに基づく解析結果をもとに学会で発表しました。

### 学会発表

下線は当財団研究員

- ◆ 第 30 回日本老年精神医学会 (平成 27 年 6 月)
  - ◇ 愈今: 高齢者の抑うつ症状発症に寄与する危険要因: 3 年間の縦断的研究
- ◆ 第 57 回日本老年社会科学大会 (平成 27 年 6 月)
  - ◇ 安順姫、愈今: うつハイリスク高齢者の近所づきあいの経年変化とその関連要因
- ◆ 日本健康心理学会第 28 回大会 (平成 27 年 9 月)
  - ◇ 島田今日子、愈今: 認知症者の家族の社会的孤立と介護負担の実態

### 報告書

- ◆ 平成 22~26 年度 B 市「高齢者の健康と日常生活に関する実態調査」報告書 (平成 27 年 8 月)

## (6) 杉並区健康長寿モニター事業

杉並区が平成 24 年度から実施している共同研究に委員として参加。区から半年ごとに提供される医療費・介護保険関連データの 26 年度分までのデータクリーニングを行い、解析可能な状態に蓄積しました。同時に、試行的な分析を行い、中間報告に向けた方向性を検討しました。また、家族以外の他者との日常的な交流状態や交流手段の視点から分析を行い、一部の結果を発信しました。

## (7) 都市高齢者の社会関係周辺部に関する研究

共同研究者らと周縁部の社会関係に関する論理的な枠組みを整理するとともに、今後実施を計画している大規模調査に向けた測定指標と調査枠組みの設計を行いました。さらに本年度は周縁部の実態を明らかにするために、国際長寿センターと横浜市との共同研究(厚生労働省老人保健健康増進等事業「インフォーマルセクターによる高齢者の生活支援等に関する調査研究」、委員として参画)で横浜市の一般高齢者を対象に実施したアンケート調査結果を分析し、学会に発表しました。

## 論文

下線は当財団研究員

- ◆ 澤岡詩野、渡邊大輔、中島民恵子、大上真一：「都市高齢者の近隣との関わり方と支え合いへの意識－非常時と日常における近隣への意識に着目して－」老年社会科学 37(3), 306-315(2015)

澤岡主任研究員は、この論文により平成 28 年度「日本老年社会学会論文賞」を受賞しました。

## 学会発表

下線は当財団研究員

- ◆ 第 57 回日本老年社会学会大会（平成 27 年 6 月）
  - ◇ 澤岡詩野、渡邊大輔、中島民恵子：「都市高齢者の近隣に対する意識と社会活動：横浜プロダクティブ・エイジング調査から」
- ◆ アジア・オセアニア老年学会（平成 27 年 10 月 タイ）
  - ◇ 澤岡詩野、渡邊大輔、中島民恵子：「Newly Started Activities of 75-Years or Older Japanese Seniors（日本の高齢者の 75 歳以上に新たに開始した活動）」

## 寄稿

下線は当財団研究員

- ◆ 澤岡詩野「地域特性に応じた『暮らしの保健室』の在り方を考える 荻窪家族プロジェクトを事例として」ダイヤニュース No.81
- ◆ 澤岡詩野 特集「こどもをつつむじいじとばあばの温かい目と手のお話」の巻頭言「次世代を育むジジとバアバの力」. animato, No.17

## 刊行物等

下線は当財団研究員

- (8) 萬書房「荻窪家族プロジェクト物語；住む人・使う人・地域の人みんなでつくり多世代で暮らす新たな住まい方の提案（荻窪家族プロジェクト編著：瑠璃川雅子、澤岡詩野、連建夫）

## (9) 中高齢者の交流媒体としての電子メールに関する研究

平成 22 年度から江戸川区で地縁団体や NPO と共に行っている社会実験により、虚弱化していく高齢者への孤立防止への効果と課題が明らかになりつつあります。この課題について、シニア社会学会の研究会として定期開催している「シニアの ICT 活用研究会（申請者が座長）」で、地域活動団体・老人クラブ・民間企業と意見交換を行いました。

## 講演

下線は当財団研究員

- ◆ 澤岡詩野、徳永和紀、牧壮：ワークショップでの講演「改めて考える、高齢者にとっての ICT とは？：人生 100 年時代の生き方・終わり方」社会情報学会大会（平成 27 年 9 月、明治大学）

## (10) ICT（情報通信技術）を活用した高齢期の社会活動継続に関する研究

ダイヤネットと三菱重工三原会の協力を得て、メンバーが後期高齢化しつつあるグループの活動を継続していくための Facebook の可能性を検討する社会実験を継続しました。2年目となる本年は、加齢と SNS 利用の課題を抽出しました。本研究で得られた成果と「(8) 中高齢者の交流媒体としての電子メールに関する研究」の結果を交えて、財団主催でシンポジウムを開催し、発信を行いました。シンポジウムの内容は 3 ページをご参照ください。

寄稿

下線は当財団研究員

- ◆ 澤岡詩野「虚弱(フレイル)と社会とのつながる手段としてのインターネット」ダイヤニュース No.83

## (11) 国際保健事業の長期的評価のための調査研究

中国の地域保健事業の効果の検証を行うとともに保健政策策定に有益なエビデンスを得ることを目的に、平成 22 年度から 8 年間の計画で、吉林省の農村部在住の高齢者を対象に基本健康診断、調査票に加え問診票による聞き取り調査を定期的に行っています。本年度は、調査票の 6 年目データを収集しました。

## (12) 中高年単身者の生活と意識に関する調査

少子高齢化の進展を踏まえ、少子化の主要因である未婚化問題、今後ますます増加が予想される単身高齢者の生活問題等に関する研究に資するため、全国の 40・50 代の男女を対象とした WEB アンケート調査を実施しました。4,000 名（未婚者 3,000 名、既婚者 1,000 名）から、恋愛・結婚・就労・生活実態・生活観・老後準備等に関する回答データを得ました。調査結果は 6 ページをご参照ください。

各研究の詳細は当財団ホームページをご参照ください

<http://www.dia.or.jp/research/>

リンクしない場合は財団のトップページからアクセスしてください

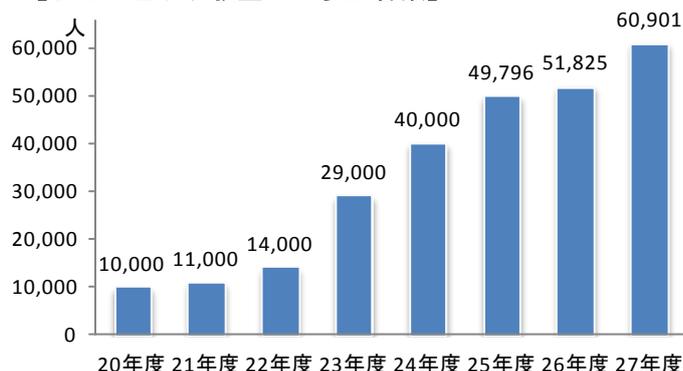


## 2. 研究成果を活かしたサービス提供等の事業 【公益目的事業1】

### (1) 有酸素運動を用いた高齢者向けエアロビック「ダイヤビック」普及活動の推進

有酸素運動を用いた元気高齢者づくりのためのエアロビック「ダイヤビック」の普及を進めています。平成27年度は9～10月にインストラクター養成講座を開催して新たに8名を認定し、インストラクターの累計認定者数は247名となりました。普及活動は、ダイヤビックひばり会（認定インストラクターで構成する任意団体）に委託しており、ダイヤビック教室を121か所、自治体等主催のイベントでのデモンストレーション11回などを開催し、延べ60,901人の高齢者に指導や紹介を行いました。

【ダイヤビック教室のべ参加者数】



### (2) 社会老年学文献データベース（DiaL）による情報提供

当財団では、設立10周年記念事業として、日本初の高齢社会に関する学術論文を網羅した「社会老年学文献データベース DiaL (Dia's Library on Social Gerontology)」を作成し、平成14年2月からWeb上で公開しています。タイトルやキーワードから、各分野の専門家の選定した論文の書誌事項と論文抄録を無料でダウンロードすることができます。



平成27年度は、7月に247件、12月に278件の論文を新たに追加し、平成27年度末における収録論文総数は8,889件となりました。

【DiaL論文収録数】



各研究の詳細は当財団ホームページをご参照ください



<http://www.dia.or.jp/research/>  
リンクしない場合は財団のトップページからアクセスしてください

### 3. 高齢社会の諸問題に関する意識啓発および活動成果の普及

【公益目的事業2】

#### (1) 財団主催シンポジウムの開催

ICT（情報通信技術）を社会との「つながり」の手段として高齢者の虚弱や認知症予防対策に活用する取り組みについて考えるシンポジウムを11月5日に開催し、ご好評をいただきました。詳細は3ページをご参照ください。

#### (2) 機関誌「Dia News」（季刊）の発行

一般向けに4号発行しました。内容は10ページをご参照ください。

#### (3) ダイヤ財団新書36の発行

当財団主催シンポジウム「人生100年時代の『つながり』を支えるICTの力」の講演録として、平成28年3月に発行しました。

#### (4) 電子書籍の配信

当財団の研究成果をより多くの方に迅速に伝えるため、スマートフォンおよびタブレット端末向けに電子書籍の配信を進めています。平成27年度はダイヤ財団新書35「ストップ 介護離職！」など4冊を配信しました。

